

日蓮大聖人御書全集

おおたどののにようぼうごへんじ

太田殿女房御返事

はつかんじごく こと

（八寒地獄の事）

新版
1369
〜
1370

おたどののにようぼうごへんじ はっかんじごく こと

太田殿女房御返事（八寒地獄の事）

けんじ ねん がつ にち

建治 3 年 ('77) 11 月 18 日

さい おおたじようみよう つま

56 歳 大田乗明の妻

かき 青 裏 こそで 綿 じゆうりよう およ そうろう

柿のあおうらの小袖、わた十両に及んで候か。

だいち した ふた じごく いち ねつじごく 炭

この大地の下は二つの地獄あり。一には熱地獄。すみを

熾 の ひ 付 焼 亡 ひ くるがね 湯

おこし、野に火をつけ、しようもうの火、鉄のゆのごと

ざいにん 焼 たいか かみ 投 たいか 鉋 屑

し。罪人のやくることは、大火に紙をなげ、大火にcaなくず

投 じごく 焼 盗 ひ 掛

をなぐるがごとし。この地獄へは、やきとりと、火をかけ

敵 攻 もの 妬 むね 焦 によにん お

てかたきをせめ、物をねたみて胸をこがす女人の墮つる

じごく

地獄なり。

に

かんじごく

じごく

はつ

ねはんぎよう

い

二には寒地獄。この地獄に八つあり。涅槃經に云わく

はつしゆ

かんぴようじごく

あはらじごく

あたた

「八種の寒氷地獄あり。いわゆる阿波々地獄・阿咤々

じごく

あららじごく

あばばじごく

うはつらじごく

はずまじごく

地獄・阿羅々地獄・阿婆々地獄・優鉢羅地獄・波頭摩地獄・

くもつずじごく

ふんだりじごく

うんぬん

はちだい

寒 じごく

拘物頭地獄・芬陀利地獄なり」云々。この八大かん地獄は、

寒

責

声

み

色

とう

あるいはかんにせめられたるこえ、あるいは身のいろ等に

そろう

くに

諏

訪

み

池

えつちゆう

立

やま

て候。この国のすわの御いけ、あるいは越中のたて山の

返

かが

はくさん

嶺

鳥

羽

閉

寡

かえし、加賀の白山のれいのとりのはねをとじられ、やもめ

媼

裾

冷

雉

子

ゆき

責

おうなのすそのひゆる、ほろろの雪にせめられたるをもつ

知

寒

頤

てしろしめすべし。かんにせめられて、おとがいのわなめ

とう

あはは

あたた

あらとう

もう

寒

く等を、阿波々・阿咤々・阿羅々等と申す。かんにせめら

み

紅

似

ぐれん

だいぐれんとう

もう

れて、身のくれないににたるを紅蓮・大紅蓮等と申すなり。

ひと

じごく

墮

もう

よ

ひと

いかなる人のこの地獄におつるぞと申せば、この世にて、人

えふく

盜

取

ふぼ

ししやうとう

寒

見

の衣服をぬすみとり、父母・師匠等のさむげなるをみまい

われ

厚

温

ちゆうや

過

ひとびと

お

らせて、我はあつくあたたかにして昼夜をすごす人々の墮

じごく

つる地獄なり。

ろくどう

なか

てんどう

もう

ところ

しやう

えふく

六道の中に天道と申すは、その所に生ずるより衣服

調

う

にんどう

なか

しやうな

ととのおりて生まるるところなり。人道の中にも、商那

わしゆ

せんびやくびくにとう

ひも

たいない

えふく

和修・鮮白比丘尼等は、悲母の胎内より衣服ととのおりて

う

たま

尊

ひとびと

えふく

与

生まれ給えり。これは、とうとき人々に衣服をあたえたる

ふぼ

しゆくん

さんぼう

清

厚

きぬ

進

のみならず、父母・主君・三宝に、きよくあつき衣をまいら

ひと

しょうなわしゆ

もう

ひと

らぎよう

しやくしぶつ

せたる人なり。商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に

きぬ

せぜしようにう

えふくみ

したが

きようどんみ

もう

衣をまいらせて、世々生々に衣服身に随う。憍曇弥と申

によにん

ほとけ

欽婆羅

え

いつさいしゆじよう

せし女人は、仏にきんばら衣をまいらせて、一切衆生

きけんぶつ

たも

喜見仏となり給う。

いま

ほけきよう

きぬ

進

たも

によにん

ごしよう

八

寒

今、法華経に衣をまいらせ給う女人あり。後生にはちかん

じごく

く

免

たも

こんじよう

だいなん

地獄の苦をまぬかれさせ給うのみならず、今生には大難を

くどく

余

なんによ

公

達

衣

はらい、その功德のあまりを、男女のきんだち、きぬにき

ぬをかさね、いろにいろをかさね給うべし。あなかしこ、
あなかしこ。

けん じさんねんひのとうしじゆういちがつじゆうはちにち
建治三年丁丑十一月十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

おおたにゆうどうどののにようぼうごへんじ
太田入道殿女房御返事